

論文の内容の要旨

The Inverse and Related Voice Constructions in Japanese: From a Functional-Typological Perspective

(日本語における逆行形および関連するヴォイス構文)

古賀裕章

本論文は、これまで見過ごされてきた直示移動動詞「くる」のヴォイスに関連する用法を、機能的に類似する受動構文、受益構文とのシステムティックな比較を通して明らかにし、日本語のヴォイス体系に位置付けることを目的とする。また、(1a) に示した「くる」の持つ話者の方向への物理的移動を表す機能と、(1b) の時間にかかわる起動アスペクトの機能、そして (1c) のヴォイスに関連する機能との間に概念的並行性が存在することを主張し、その拡張のメカニズムを提案する。

- (1) a. タロウが部屋に入ってきた。
b. 外が暗くなってきた。
c. タロウ手紙を送ってきた。(＃タロウが私に手紙を送った。)

以下、各章の概要を述べる。

(第一章)

Shibatani (2003) は、(1c) に見られる「てくる」が、(2) に挙げた人称の階層の下位に位置する参与者から上位に位置する参与者に移動/行為が行われた場合に現れるという点で、北アメリカのアルゴンキン諸語に広く見られる逆行態標識と類似した、ヴォイスに関連する機能を有すると特徴づけた。

- (2) 日本語の人称の階層：1人称 > 2人称 > 3人称

本稿は、この逆行態標識「てくる」に関して、特に (3) に挙げた4つの問題を提起し、以下の章でそれぞれについて考察する。

- (3) 日本語の逆行標識「てくる」に関する4つの問題

- a. 逆行態標識/逆行構文をライセンスするための意味的、統語的、語用論的条件は何か。同じ概念内容を表しうる複数の構文の中で、逆行構文を選択する動機は何か。
b. 直示移動動詞「くる」が逆行態標識に文法化するメカニズムは？空間移動や時間・ア

スペクトを表す「くる」の機能との間に、どのような概念的な繋がりが見出せるのか。

- c. 話者の方向への移動を表す要素が逆行態標識に文法化するという現象は、日本語に特化した現象なのか。
- d. 日本語の逆行構文とアルゴンキン諸語やその他の言語の逆行構文の違いは何か。

最後に、先行研究に言及しながらヴォイスとダイクシスの定義を概観した。

(第2章)

本章では、まず人称の階層が文法を考える上で重要な役割を果たすということ、様々な言語の格標識やヴォイスの選択、人称の一致を例に議論し、そして Shibatani (2003, 2006) が提示する「てくる」の分析の問題点を指摘した。Shibatani (2003, 2006) は、「てくる」を含む逆行態と受動態がいずれも人称の階層の下位の参加者から上位の参加者に対して働きかけが行われた場合に生起するヴォイスであるとし、その機能のすみ分けは主動詞の意味によってなされるという分析をしている。これは、主動詞が移動を表す場合には逆行態 (4a) が、行為を表す場合には受動態 (4b) が選択されるというものである。

- (4) a. タロウが (私に) ボールを投げてきた。
- b. (私は) タロウに殴られた。

しかし、逆行態と受動態の選択が主動詞の意味によって決まるという分析には反例が認められる。例えば (5a) が示すように、移動を表す動詞が受動態に生じることもあるし、(5b) のように行為を表す動詞を逆行態で使用することも可能である。

- (5) a. タロウに鍵を渡された。(cf., タロウが鍵を渡してきた。)
- b. タロウが (私を) 殴ってきた。(cf., (4b))

これらの観察から、逆行態と受動態の選択は主動詞の意味のみによって決まるわけではなく、両ヴォイスの生じる構文の意味的、統語的、語用論的特徴に動機づけられていると見るべきである。

(第3章)

本章では、逆行構文と受動構文の意味的、統語的、語用論的違いについて論じた。まず両構文における動作者の話題性に違いが見られる。逆行構文の動作者は受動構文の動作者よりも話題性が高い。この語用論的な違いは、逆行構文の動作者が、対応する能動構文の動作者同様、主語の役割を担っているのに対し、受動構文の動作者は選択的な斜格項に降格されている、という統語的な違いに動機づけられている。つまり、能動/順行構文と逆行構文の交替には、受動構文の場合とは違い、文法関係の変更も結合価の減少も見られないのである。

意味的な違いに目を向けると、以下の3点から逆行構文が因果連鎖の起点、行為局面を焦点化するのに対し、受動構文は因果連鎖の終結点、結果局面を焦点化することがわかる。まず1点目は、動詞事象の実現を打ち消すことができるかどうかである。ある種の表面接触動詞を逆行構文で使った場合、(6a) が示すように結果である接触の打ち消しが可能である。一方、(6b)、(6c) に見られるように受動構文、能動構文の場合には結果のキャンセルが許容されない。

- (6) a. タロウが殴ってきたが、うまくかわした。
 b. *私はタロウを殴ったが、あいつはうまくかわした。
 c. *タロウに殴られたがうまくかわした。

2 点目は、行為を焦点化する逆行構文の動作者は意図的行為者に限定されるが (7a)、結果状態を焦点化する受動構文にはそのような制約が見られない (7b) という事実である。この制約は能動構文にもやはり当てはまらない (7c)。

- (7) a. タロウは私の足を{わざと/*うっかり}踏んできた。
 b. 私はタロウに{わざと/うっかり}足を踏まれた。
 c. 私は{わざと/うっかり}タロウの足を踏んだ。

3 点目は、状態変化動詞との相性の悪さである。「殴る」、「蹴る」などの表面接触動詞とは異なり、「折る」、「壊す」などの状態変化動詞は被動者の被る状態変化を特定する。これらの動詞が対応する自動詞を典型的に持つのはこのためである（「折れる」、「壊れる」）。このような特徴を持つ状態変化動詞は、因果連鎖の行為局面よりも結果局面に焦点を当てる。従って (8a) の許容度が低いのは、動詞のプロファイルと逆行構文のプロファイルの間に齟齬が生じるためと考えられる。

- (8) a. ??タロウが (私の) 足を折ってきた。
 b. タロウが足を折ろうとしてきた。
 c. (私は) 足を折られた。

「V (動詞) しようとする」という動作者の意図性を前景化すると同時に結果の達成を背景化する要素を付加すると、(8b) のように逆行構文が成立することも、逆行構文が因果連鎖の起点、行為局面を焦点化するという分析の妥当性を示すものである。一方、受動構文は状態変化動詞とプロファイルが一致するため、(8c) のように問題なく成立する。

日本語の受動構文、逆行構文の選択が以上のような意味的、統語的、語用論的な特徴によってなされていることを明らかにした。

また本章では、(1) に見られる「くる」の物理的移動を表す機能、起動アスペクトを表す機能、そして逆行態標識としての機能の間に存在する概念的並行性が、「くる」の語彙的意味に内在するイメージスキーマの保存に動機づけられていると主張した。このスキーマにおいて、話者は直示的中心に静止し、自らを取り巻く直示領域に出現するモノ・事態を知覚、認識する主体である。話者の直示領域に出現するのが自律移動の主体である場合には、「くる」は (1a) の物理的移動を、非意図的な状態変化を表す事象である場合には (1b) の起動アスペクトを、そして動作者によって外的に引き起こされた他動的行為である場合には逆行態というヴォイスに関連する機能を担うのである。これが問題 (3b) に対する解答である。

(第4章)

本章では、(9) のような「てくれる」を含む受益構文が、(2) に挙げた人称の階層の下位の参与者から上位の参与者に移動/行為が行われた際に生起することから、「てくる」同様逆行標識と

認めたくえで、両者の違いを考察した。

(9) タロウが（私に）手紙を送ってくれた。（cf., (1c)）

「てくる」を含む逆行態と「てくれる」を含む逆行態の意味的な違いは、以下のような文脈で顕著に表れる。

- (10) a. タロウがやさしくしてきた。
b. タロウがやさしくしてくれた。
c. ??タロウがやさしくしてきてくれた。
d. タロウが手紙を送ってきてくれた。

「てくる」を含む逆行構文は (10a) のように予期していなかった事象を表すことが多く、その事象は往々にして話者に悪影響を及ぼす。これに対して、(10b) の「てくれる」を含む逆行構文は常に話者に良い影響を及ぼす事象を表す。よって、両者を同じ節で用いると意味的に矛盾をきたすこととなることが多く、(10c) のように不適格な文となる。以上の観察から、「てくる」は中立/受害逆行形、そして「てくれる」は受益逆行形と特徴づけられる。(10d) が示す通り、両構文は完全に相互排他的ではないが、逆行領域において両者による興味深い機能のすみ分けが日本語に生まれつつある。

(第5章)

本章では、「てくる」を含む逆行構文の項共有パターンについて論じた。連動詞構文においては主語一致、主語変更、動詞主語パターンの3つが主要な項共有パターンとされているが、これは日本語の複合動詞の形成に関しても同様である（松本 1998）。様々な例を統一的に扱うには、「てくる」を含む逆行構文の項共有パターンが、動詞主語パターンであるとする分析が最も妥当であることを示した。

以上第3章、4章、5章の議論において問題 (3a) に対する答えを提示した。

(第6章)

この章では、日本語に見られる話者の方向への移動を表す要素（「くる」）から逆行態標識への拡張が日本語に特有の現象ではなく、地理的にも類型論的にも異なる多くの言語において観察されることを、東南アジア、北アメリカ、オセアニア言語の例を挙げて示した。この議論で問題 (3b) に対する解答が与えられた。

(第7章)

この結論の章では、これまでの議論を総合して、日本語のヴォイス体系、および逆行構文に見られる言語特有の特徴を典型的な逆行言語との比較を通して特定し、そして残された問題について議論した。この章において、問題 (3d) に対する答えが提示された。